

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-179	14-099	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Effects of study design and allocation on self-reported alcohol consumption: randomized trial. ランダム化比較試験における自己申告のアルコール摂取量への研究デザインと割り付けの影響		
執筆者		
Kypril K, Wilson A, Attia J, Sheeran PJ, McCambridge J.		
掲載誌		
Trials. 2015 Mar 28;16:127. doi: 10.1186/s13063-015-0642-0.		
キーワード		PMID
アルコール消費量、無作為割付、研究デザイン、大学生		25872651
要 旨		
<p>目的：無作為割付した研究対象者の追跡調査における自己申告の飲酒行動は、研究デザインや割り付けられたグループに影響を受けるかを検討した。</p> <p>方法：ニュージーランドの4つの公立大学より募集した参加者72,903人のうち、ベースライン調査を完了した10,415人から適正飲酒者を除外した6,788人を研究対象者として、無作為に観察研究グループ（介入なし）とRCTグループ（対照群または介入群）の3群に分けた。いずれの対象者も自分の参加している研究デザインとRCTグループでは割付を知らされ、介入群は介入を受けた。すべての群に対してオンラインのアルコール教育プログラムを読むように指示し、教育プログラムを閲覧するかどうかと閲覧時間を記録した。すべての群で1か月後の飲酒量を調査した。</p> <p>結果：①自分が参加している研究のデザインが介入研究の者は、観察研究の者に比べて、②RCTグループでは、介入群に割り付けられた者が対照群に割り付けられた者に比べて、1か月後の飲酒の申告量が少なくなると仮説をたてたが、研究デザインまたは介入の割り付けによって飲酒の申告量に有意な差は認めなかった。ただし点推定値では、介入群の方が対照群に比して飲酒量が少ない傾向があった。教育プログラムの閲覧者の割合は、観察研究グループ59%と介入研究の対照群57%でほぼ同等であったが、介入研究の介入群では78%とより閲覧する傾向にあり、閲覧時間も他の2群に比べて長かった。</p> <p>結論：オンラインの教育プログラムを読んでいる時間は対象者に影響を与えるが、飲酒行動への波及は見られなかった。この結果は、方法論の失敗か、オンラインによるアプローチは弱い影響しか与えない可能性が考えられた。</p>		